

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 26 日現在

機関番号：31604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24653146

研究課題名(和文) HIV陽性者を対象としたサポート・グループの実践過程

研究課題名(英文) A Study of Practical Process of Peer Group for People Living with HIV

## 研究代表者

清水 茂徳 (SHIMIZU, Shigenori)

東日本国際大学・福祉環境学部・准教授

研究者番号：50615961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)： HIV陽性者が抱えている生きづらさへのケアにおいて、サポート・グループが果たしている機能と役割の実態について把握することを目的とし、参加後自己記述式アンケートの分析を行い、実践過程を把握するための検討を行った。その結果、回答者はHIV陽性者以外の他者とHIVに関連する場に居合わせることに抵抗を感じている中で、他のHIV陽性者との対面や交流を安心して行える場としてのサポート・グループへの参加に至った可能性が示唆された。日本国内においてもサポート・グループの普及に向けての動向が注目される状況にあり、実践を支えていくための取り組みが求められている。

研究成果の概要(英文)： This study was designed to assess the role of peer group for people living with HIV, in the matter of care for their difficulty in daily life. In this study, we analyzed in detail questionnaires which participants filled after peer counseling, and clarified significance of peer counseling group on people living with HIV.

Analyzing the questionnaires, we have received some valuable suggestions. 1.They, people living with HIV, feel difficulty to participate in the lecture meetings which are admitted to people without HIV. 2.Conversely, they thought peer counseling groups were place of refuge and comfort, therefore they carefreely took part in counseling groups and interacted and exchanged opinions there.

Recently, especially in big cities in Japan, some new peer counseling groups have been organized and started to do their practice. We have to pay attention to such groups and begin to consider how to promote peer counselings.

研究分野：社会科学

キーワード：ソーシャルワーク サポート・グループ HIV陽性者

## 1. 研究開始当初の背景

HIV 感染症は、「治療の進歩により『不治の病』から『コントロール可能な慢性疾患』へと変わってきた(日笠 2004:140-50)が、HIV 陽性者は「さまざまな理不尽な状況の中で苦しめられ、正当な社会生活の営みを阻害される」状況にあり(小西 1997:1)、「社会の持つ HIV へのネガティブイメージがスティグマとなり、そのため HIV を抱えて生きることが困難さや生きにくさとな」っていることが指摘されている(池上ら 2001:9)。

HIV 感染症の場合、感染症としての「エイズ」、死に至る病としての「エイズ」というスティグマが感染告知後の HIV 陽性者に多様な影響を与え、スティグマがゆえに、経験や思いを言葉にする機会が限られてきたことは想像に難くない。

HIV 陽性者らは、「体験や気持ちを話したくとも話せない状況に長く置かれてきて、基本的には話したい、共感者や理解者を得たいという思いを強めている」ことから、「語り」を重視し、耳を傾ける姿勢が重要であると指摘されている(はばたき福祉事業団調査研究準備委員会 1997:3)。HIV 陽性者を対象としたサポート・グループは、近年、筆者によるものも含め、少なからぬ実践が日本においてなされ始めている。それらは、必ずしも当事者でなく医療従事者でもないボランティアな援助者によって運営されているケースもみられ、医療関係者が認知している度合いは他の疾患に群を抜いているとも指摘されている(小西ら 2004:67-72)。

サポート・グループにおける留意点として、山崎が、薬害 HIV 感染被害者および遺族のグループや組織についての文脈ではあるが、「行政や保健医療福祉の専門家からの独立性が保たれているか否かが決定的に重要」(山崎 2008:239)であると指摘しているが、筆者の調査研究においても、HIV 診療を行う医療従事者からの独立性を保つことの重要性が示され、その立ち上げや維持を支えていく取り組みが求められていることが示唆された(清水 2010:178-9)。むしろ、この結果は、医療従事者主導のサポート・グループの重要性を否定するものではないが、医療従事者から独立し、HIV 陽性者自身やボランティアな援助者によって運営されるサポート・グループは、そうした機会のみでは成し得ない独自の役割と機能を有しているのである。しかし、接近困難性が指摘される中、HIV 陽性者の「語り」を重視した研究が充分に行われているとは言えない状況にある。

## 2. 研究の目的

HIV 感染告知を受けることは、「本人の身体観や対人関係のあり方、生死に対する価値観などを揺るがす重大な出来事」(矢永 2004:71)であり、告知前から告知後に続く、自己概念に大きな影響を与える一連の経験である。ソーシャルワーカーには、当事者の

体験そのものへの理解が求められ(Knight 2006)、物語的理解の延長上に「告知」やその後のケアがなされることが重要である(野口 2002:29)と指摘されているが、薬害 HIV 感染被害者を対象とした研究(薬害 HIV 感染被害者(患者・家族)生活実態調査委員会 2005)はあるものの、HIV 陽性者の「語り」から HIV 感染告知が及ぼす影響を探求する取り組みが十分に行われているとは言えない。

以上のような問題意識に基づき、本研究は、まず、支援の主要な柱と位置づけられている(Taylor-Brown 1995:1299-1300;野島ら 2002:73-9;佐藤 2002)サポート・グループ参加者の参加後自己記述式アンケートを集計分析し、HIV 陽性者が抱えている生きづらさについて把握するとともにサポート・グループが果たす機能と役割について総合的に把握することを目的とする。さらに、サポート・グループの日本での実践について実態を把握し、また、サポート・グループの普及の可能性の観点から、グループの立ち上げから継続、発展等の過程を検討することで今後のサポート・グループの普及に寄与することを第二の目的とする。

## 3. 研究の方法

研究目的を達成するために、筆者が東京都内で実践している医療従事者からの独立性を保った HIV 陽性者を対象としたサポート・グループ参加者の参加後自己記述式アンケートの集計分析を行った。また、HIV 陽性者が抱えている生きづらさへのケアにおいてサポート・グループが果たす機能と役割の実態を把握するための検討を行った。データ解釈の妥当性を確保するため、HIV 陽性者を含む協力者のチェックのプロセスを踏んだ。なお、プライバシー保護の観点から、論文の執筆および研究結果の公表は調査対象者の氏名(ニックネーム)、居住地域、利用施設(機関)、援助者名等の固有名詞を匿名とし、利用者等の年齢は十代とするなど個人を特定できないよう十分配慮して行うこととした。

## 4. 研究成果

筆者が東京都内で実践している医療従事者からの独立性を保った HIV 陽性者を対象としたサポート・グループ参加者の属性データおよび参加後自己記述式アンケートの集計分析を行ったところ 2004 年度から 2015 年度までの実参加者は 110 名だった。内訳は性別が男性 89%、女性 11%、年代は 30 代が 47%でもっとも多く、20 代が 26%、40 代が 21%の順だった。感染経路は同性間の性的接触が 83%、異性間の性的接触が 14%、凝固因子製剤が 1%、その他が 2%だった。感染を知ってからの期間は 1 年以内が 43%ともっとも多く、1~3 年が 20%、3 年以上が 37%だった。また、97%が通院しており、66%が抗

HIV薬を服用していた。

回答者がこれまでに利用経験のあるボランティア団体等のサービス(複数回答)は「インターネット掲示板の閲覧」「会報や機関誌の購読・閲覧」「対面での相談」「陽性者限定の交流会」の順であり、他者と対面せずに済むサービスの利用が上位を占めている一方で、対面する他者が限定されたサービスを利用している状況も浮き彫りとなった。利用に抵抗のあるサービス(複数回答)は「陽性者限定でない交流会」「陽性者限定でない講習会」の順であり、HIV陽性者以外の他者とHIVに関連する場に居合わせることに抵抗を感じていることが示唆された。また、利用に抵抗のあるサービスとして「インターネット掲示板への投稿」が続いており、匿名性が一定程度保たれていたとしても不特定多数が利用するインターネットへ投稿することについての抵抗感が拭えない状況があり、それは一度流出したら取り返しが付かないという警戒感が背景にあるものと推察された。サポート・グループへの参加理由(複数回答)は「他の人の思いや体験を聞いてみたかったから」が85%と最も多く、以下、「他の感染者に会ってみたかったから」65%、「安心して集える場が欲しかったから」39%、「自分の思いや体験を話したかったから」35%の順であった。これらの結果から、回答者は他者と対面せずに済むサービスの利用経験が比較的多く、HIV陽性者に限定されない場への参加に抵抗を感じる傾向を持つ中で、他のHIV陽性者との対面や交流を安心して行える場としてのサポート・グループへの参加に至った可能性があると思われる。

自分以外のHIV陽性者との対面や交流を安心して行える場としてサポート・グループが期待されている中、日本国内においてもHIV陽性者を対象とした新たな実践が始まっており、2013年に開催された第27回日本エイズ学会学術集会・総会において「地方都市におけるHIV陽性者、そのサポートは？」と題したシンポジウムの中で福岡・鹿児島・沖縄での事例が報告され(戸川2013;今村2013;與那嶺2013)、2014年には大阪(白野ら2014)、2015年には新潟・石川での事例が報告された(藏田ら2015;古川ら2015)。また、全国のHIV陽性者向け交流会、グループ・ミーティング等の予定が一覧でインターネットに公開される(HIV Futures Japanプロジェクト2016)など普及に向けての動向が注目される状況にある。しかし、HIV陽性者自身やボランティアな援助者が自らの力のみでサポート・グループを立ち上げ、維持することは容易ではない。また、HIV陽性者の多様な背景やニーズに応えていくことも必要である。今後も引き続き、サポート・グループの普及の可能性の観点から、グループの立ち上げから継続、発展等の過程を検討する等、サポート・グループの実態把握と検討を行っていききたい。

#### <引用文献>

- 古川夢乃・山下美津江・青野加奈子・ほか(2015)「当院における当事者の自助グループの発足とその経過報告」『日本エイズ学会誌』17(4), 216.
- はばたき福祉事業団調査研究準備委員会(1997)『薬害HIV被害救済に関わる調査研究のあり方について』はばたき福祉事業団.
- 日笠聡(2004)「HIV感染症治療のガイドラインの変遷」『日本エイズ学会誌』6(3), 145-51.
- HIV Futures Japan プロジェクト(2016)「ミーティング・イベント」(<http://futures-japan.jp/meeting/>, 2016.6.20).
- 今村葉子(2013)「鹿児島におけるHIVの今後—HIV陽性者の視点から—」『日本エイズ学会誌』15(4), 101.
- 池上千寿子・野坂祐子・生島嗣(2001)「生活者としてのHIV陽性者を取り巻く人権問題」『平成12年度厚生科学研究費補助金エイズ対策研究事業「エイズと人権・社会構造に関する研究」研究報告書』7-19.
- Knight, Carolyn (2006) Groups for Individuals with Traumatic Histories: Practice Considerations for Social Workers, *Social Work*, 51(1), 20-30.
- 小西加保留編(1997)『エイズとソーシャルワーク』中央法規出版.
- 小西加保留・鬼塚哲郎(2004)「サポートグループのあり方を考える」『日本エイズ学会誌』6(2), 67-72.
- 藏田裕・三浦かおり(2015)「新潟陽性者ピアミーティング「らっくら」取組報告」『日本エイズ学会誌』17(4), 216.
- 野口裕二(2002)『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院.
- 野島一彦・矢永由里子編著(2002)『HIVと心理臨床—最前線からの報告:心理臨床の実践と課題,そしてあらたな展開へ向けて』ナカニシヤ出版.
- 佐藤知久(2002)「共通性と共同性—HIVとともに生きる人々のサポートグループにおける相互支援と当事者性をめぐって」『民俗学研究』67(1), 79-98.
- 清水茂徳(2010)「HIV感染告知後のサポート・グループ参加者の経験過程—HIV陽性者の語りからの探求」『社会福祉士』17, 174-80.
- 白野倫徳・岳中美江・伊達直弘・ほか(2014)「地域における新規HIV陽性者対象プログラムの実践と課題—大阪での「ひよっこクラブ」5年間の振り返り—」『日本エイズ学会誌』16(4), 277.
- Taylor-Brown, Susan (1995) HIV/AIDS: Direct Practice, Edwards, Richard L., et al. eds. *Encyclopedia of Social Work 19th edition*, NASW Press, 1291-305.
- 戸川貴一朗(2013)「福岡におけるHIV陽性

者交流会の施行と展望」『日本エイズ学会誌』15(4), 102.  
薬害 HIV 感染被害者(患者・家族)生活実態調査委員会(2005)『薬害 HIV 感染被害者(患者・家族)への面接調査報告』.  
山崎喜比古・井上洋土編(2008)『薬害 HIV 感染被害者遺族の人生—当事者参加型リサーチから』東京大学出版会.  
矢永由里子(2004)「HIV 感染告知直後の患者の心理過程と危機介入」『心理臨床学研究』22(1), 71-82.  
與那嶺敦(2013)「沖縄・陽性者ミーティングの運営システム」『日本エイズ学会誌』15(4), 103.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)  
該当なし

〔学会発表〕(計0件)  
該当なし

〔図書〕(計0件)  
該当なし

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)  
該当なし

取得状況(計0件)  
該当なし

〔その他〕  
該当なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

清水 茂徳 (SHIMIZU, Shigenori)  
東日本国際大学・福祉環境学部・准教授  
研究者番号: 50615961

### (2)研究分担者

該当なし